東雲

第15号　平成14年（2002）3月

南部広域行政組合
島尻教育研究所

目　　次

○　教育研究所の役割と学校との連携
所　長　比　嘉　恒　雄……1

○　学習指導要領の完全実施にあたって
南部広域行政組合教育委員会　教育長　金　城　政　安……3

○　修了者および前期入所予定者、指導講師一覧……4

○　研修を終えて　教育研究員……5

○　教育講演
「21世紀をめざす教育新生の課題と展開－自ら学ぶ子どもをどう育てるか－」
ベネッセ教育研究所
顧　問　高　階　玲　治……12

教育研究所の役割と学校との連携

島尻教育研究所
所長 比嘉恒雄

多くの関係者の長年の夢が実現し，島尻教育研究所が設立されたのは，平成6年4月のことでありました。設立当初の運営の基本方針「三人行えば，必ず我が師あり」を研究所の礎として，大切にしながらこれまでの数多くの尊い提言と，温かい激励をいただき，現在の形ができあがったと思います。

教育改革や地方分権を迎えたこの時期に，今までを振り返りこれからを展望することは，教育研究所の今後を考えるに，きわめて有意義なことだ思い，標題のことについて考えてみたいと思います。

さて，教育改革を支え，生涯学習時代に的確に対応する教師の資質・能力を備え，「教養審」(平成11年12月答申)が強調しております教師は，個々の教師としての自己教育力が強く求められていると思います。ちなみに，本稿では教師としての自己教育力を教育実践の側面からとらえて，「教育研究の仕方」と「自己変革，自己形成を求め続ける教師」としておさえたいと思います。

実践科学の一つである「教育研究の仕方」は，教師としての自己教育力の中核的な資質であると思います。そこで，研究所で大切にしましたのは，教育研究のすべての基盤になる児童・生徒の実態の分析力をつけることに，特にこだわりました。

「現場主義」，「正しい前提が正しい方法を生み出す」と言われますように，児童・生徒の実態の姿をよく見つめ，その本質を見抜き，課題を絞り込む，洞察力の大切さを教育研究員には気づかせるようにしました。その具体的な手順として，育てたい「望ましい幼児・児童・生徒像」と現実の幼児・児童・生徒とのズレの内実を分析・考察し，その結果に基づいて，「どこを、どうするか」の着眼点と方向性を明確にし，課題解決の研究テーマにつなぐようにしました。しかし，そこには接点として，教師の実践上の課題も検討の対象にしなければ根本的な課題解決になりません。

このような一連の手順をふまえることで，研究の方向性が絞られてきますと，「研究のへそ」にあたる自分なりの具体的な課題解決の「手だて」仮説が大きなポイントになります。それは，今まで培ってきた教育観，指導観，評価観等についての検討であり，幼児・児童・生徒へのかかわり方の具体化であります。

そこで，研究員はこのことを創造するために，研究テーマに関する良質な関係する資料を収集し，異なる実態や条件のもとに，「どこを，どう修正して」研究の中に，溶かし込んでいくか，資料をアレンジする力を高めるようにその工夫を求めました。

研究でおさえるべき基本的な原則にふれましたが，校種や研究テーマによって多少の違いがあることを認識をしてほしいと思います。教師の自己変革につきましては，後段に譲りたいと思います。

ところで，教師の日々の活動の中で、多くの時間は聞く，話すの内容で占められていると思います。それと同時に，これからの社会の変化に対応していくためには，教師もコミュニケーション能力を高めることが，大切なことだと思います。

そこで，研究所では「大切な話」「三分間スピーチ」の時間を設定し，話の切り口，話のまとめ方，話の組み立て，話の効果的な伝え方等について，相互の力量を磨いています。

特に，本学年度の特色ある研修事業を取り上げておきたいと思います。今日まで，研修の面であまり陽が当てられていなかった，公立幼稚園の教師への研修で，特に本年度は幼稚園の教頭・主任等のリーダーシップと指導力等の向上を揚げました。この研修のメニューを通して，園長との関係，教頭や主任の職務を実践的に学ぶことができたとの多くの声が伝わってきました。これを契機にして，管内公立の幼稚園の園内研修の活性化につなげてほしいことを期待致します。

結びにあたって，教育研究所が抱えている課題に，人材育成，継続研究等に関することで，学校との連携については，弱さを感じています。研修で得た成果をもとに，「自己変革，自己形成を求め続ける教師」すなわち，自己の高い志を持つ教師に成長することを目指して研修を推進しております。しかし，現状は，これらの条件整備が十分できていませんので，今後はこれらのことに関して，総合的に検討し，教育研究所と学校との連携を密にして，人材育成につなげ，自己の職能成長に情熱を傾けながら，自己のライフステージを描くことができることを期待したいものであります。

学習指導要領の完全実施にあたって

南部広域行政組合教育委員会
教　育　長　**金　城　政　安**

南部広域行政組合島尻教育研究所が平成6年開所以来，長期研修，短期研修の内容が年々充実し，平成13年度までに長期研修者が幼稚園16名，小学校76名，中学校17名，計111名の研究員を送り出し，その研究修了者が学校現場において学校経営の中核となって精進していることは誠に喜ばしい限りであり，これまでご指導下さいました関係各位に対し心から敬意を表すると共に感謝を申し上げます。

さて，皆さんもご承知の通り，新しい学習指導要領が今年4月から完全実施となります。学習指導要領では教育内容を厳選し，それにより生じたゆとりの中で，基礎・基本をしっかり身に付けさせ，それを基に自ら考える力などの「生きる力」を育むことがねらいとされています。文部科学省は平成14年1月17日に確かな学力の向上のための2002アピール「学びのすすめ」を発表し，指導に当たっての重点を明らかにした5つの方策を次の通り示しております。

(1) きめ細かな指導で，基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身につける。

(2) 発展的な学習で，一人一人の個性等に応じて子どものもつ力をより伸ばす。

(3) 学ぶことの楽しさを体験させ，学習意欲を高める。

(4) 学びの機会を充実し，学ぶ習慣を身につける。

(5) 確かな学力の向上のための特色ある学校づくりを推進する。

この5つの方策の実施をするためには各学校が学習指導要領のねらいをしっかりと理解し，教育課程に位置づけて展開していくことも大切であるが，これに増して大切なことは個々の教師の意識を改革し，新しい学力観に立った授業実践を進めていくことが最も大切だと考えます。

教師の「意識は確かに変わりつつあるが授業そのものは変わっていない」という指摘もあります。教師は常に子どもの実態に応じたカリキュラムや教育内容を編成し，教授法を工夫するなどの教育活動を展開するための創造的な能力や，学校内部にとどまらず地域のさまざまな施設や人材との協力関係を作り上げ，実のある授業の展開を進めていくことが重要だと考えます。

よい教師像とは

○子どもの夢を育む教師

○自らを高めようとする教師

○人を育て，夢を育てる教師

○学力を「外部から与えられた力でなく，内なる発想力」としてとらえられる教師

と言われています。よい教師像をめざして精進することを期待します。

最後に宇宙での実験者毛利さんは次のことを言っています。

「大人が子どもにしてあげられることは，生きることの夢を与えることだ。」

子どもも教師も目を輝かせ，胸をわくわくさせながら生きることの躍動感や充実感を味わわせながらロマンと夢のある学校生活を送ることはなんとすばらしいことでしょう。

平成13年度　後期　教育研究修了者及び研究テーマ一覧

No. 氏　名	勤務校	教科・領域	研究テーマ
1 長嶺　初美	糸満市立 高嶺幼稚園	幼稚園教育	幼児が豊かな言葉で表現する援助の工夫 －自分の思いや考え、感動体験を話す活動を通して－
2 金城　淳子	与那原町立 与那原小学校	生　　活	一人一人の思いや願いを生かし、生き生きと活動する児童の育成 － 公共物や公共施設の利用を通して －
3 嶺井のぞみ	玉城村立 百名小学校	生　　活	児童が生き生きと活動していく学習指導の工夫 － 地域素材の教材化を通して －
4 與那嶺正子	与那原町立 与那原小学校	社　　会	興味・関心を持って楽しく学ぶ児童の育成 －社会科学習における「つかむ」段階の指導を通して －
5 上原　康秀	糸満市立 潮平小学校	総合的な学習の時間	見通しを持ち，自ら学ぶ児童の育成 － 総合的な学習における課題作りを通して －
6 神里美智子	糸満市立 糸満中学校	数　　学	基礎的・基本的な内容の定着を図る学習指導の工夫 － 問題解決的な学習を通して(1年方程式)－
7 唐真　　清	豊見城村立 豊見城中学校	数　　学	生徒が主体的に学習に取り組む学習指導の工夫 －図形領域におけるコンピュータの活用を通して －

平成13年度指導講師及び担当教科

指導講師	教科・領域	所属等	指導講師	教科・領域	所属等
名嘉元美佐子	幼稚園教育	豊見城村立 座安幼稚園　教頭	金城　恵子	幼稚園教育	東風平町立 白川幼稚園　教頭
上原須美子	幼稚園教育	糸満市立 西崎幼稚園前教頭	宮城　貞子	生　　活	南風原町立 津嘉山小学校校長
上原　弘子	国　　語	南風原町立 翔南小学校　校長	武内　典子	生　　活	玉城村立 船越小学校　教頭
川平　敏子	特殊教育	糸満市立 高嶺小学校　教頭	棚田　彰夫	社　　会	南風原町立 南風原小学校教諭
糸数ハツ子	生　　活	玉城村立 玉城小学校　教頭	辺土名清子	総合的な学習の時間	知念村立 知念小学校　校長
安谷屋守松	社　　会	大里村立 大里中学校　教頭	大城　盛幸	数　　学	県教育庁島尻教育事務所　指導主事
山城　直三	教育相談	豊見城村立 豊見城小学校校長	池村　康男	数　　学	与那原町立 与那原中学校教諭

平成14年度　前期　入所予定者及び希望研究テーマ一覧

No. 氏　名	勤務校	教科・領域	研究テーマ
1 嘉手苅すみ江	与那原町立 与那原東幼稚園	幼稚園教育	豊かな感性を育てる環境の工夫
2 大城　美恵子	大里村立 大里南小学校	幼稚園教育	園内研修の充実をめざして －一人一人の教師が育つための研修体制を築くには－
3 砂　川　　充	糸満市立 米須小学校	算　　数	（指定テーマ）基礎的・基本的事項の定着を図る学習指導の工夫
4 前新　マチ子	糸満市立 光洋小学校	生　　活	児童が主体的に活動する授業づくりの工夫 －地域素材を生かした活動を通して－
5 金城博美	東風平町立 東風平小学校	学級経営	望ましい人間関係を育てる学級経営
6 渡名喜留美子	豊見城村立 豊見城小学校	総合的な学習の時間	国際理解教育の一環としての小学校外国語の(英語)学習の試み－聞く・話す等の体験的な活動を通して－
7 名嘉真　朝靖	糸満市立 西崎中学校	数　　学	学習指導の工夫（少人数指導を通して）

出会いから学ぶ

― 所外研修から学んだこと ―

糸満市立高嶺幼稚園教諭　長　嶺　初　美

ようやく，夏の盛りも過ぎたすがすがしい季節の１０月。自分を高めようと張り切って入所した島尻教育研究所。幼稚園という‘井の中’にどっぷり浸っていた私は，この６ヶ月間，毎日ほどよい緊張感を持ちながら幅広い研修を積んできました。その中でも，所外研修は特に楽しみにしていて，数々の視察研修のおかげで視野を広めることができました。たくさんの人との出会いから学んだことの一部を紹介します。

ＯＣＣ本社

コンピュータ操作方について（Ｗｏｒｄ）懇切丁寧に教えて下さり，初心者の私でも文章作成ができたので，レポート提出の不安感を取り除いてくれました。コンピュータの便利さを知り，情報化社会の中でうまく活用していきたいと思いました。

沖縄国際センター

「人づくり，国つくり，心のふれあい」のキャチフレーズで技術協力を主体に世界各国から各専門家の人達が集まり様々な分野で研修を積み重ね，自国の発展のため尽くしていることを知る良い機会になりました。また，国際理解に向けて，児童や生徒，教師等地域との様々な交流を図っていることも理解しました。

沖縄少年院

沖縄少年院の職員の説明から，少年の非行は，現代社会のひずみで起きており，そのひとつとして大人になりきれない親に育てられたことも要因となっていることを知りました。教師は，教育現場において，家庭との協力を得ながらお互いに信頼し，子どもの心の支えとなるように努めていかなければならないと強く決心しました。

沖縄女子学園

出院後は，入園して来る人はいないことや電話での連絡があることから，職員との信頼関係がしっかり出来ていることを感じました。沖縄の特徴として虞犯が多いことも解りました。職員の誠心，誠意に満ちた矯正教育によって社会復帰していく姿に安心し，環境によって人は変わるということを考えさせられました。

ビオトープの創造と活用　　野鳥，小動物の観察

日本国内の鳥類６００種の７５％が県内に生息していることには驚きました。与根の三角池が野鳥の宝庫とは知らず，無知を恥じながら双眼鏡を通して見る鳥の美しさに時間を忘れてしまいました。

やんばる海水揚水発電所

世界初の実証試験場であり，自然環境の保護と開発との調和を求めた大規模な施設に大きな期待をよせています。残り２年間の試験期間ですが，将来が楽しみな，夢のある発電所です。

名護マルチメデイア館

コンピュータグラフィクス設備を中心に音響スタジオやインターネット等の設備があり，関連の開発を主に行っています。市民に最新技術や情報を提供して共有してほしいと願いました。

名護１０４センタ

沖縄１０４センタは全国の番号案内の約５％を扱う日本最大の番号案内センタであります。東京からも電話がかかってくるので，２３区の地図を作製して勉強しているとは予想がつきませんでした。短時間で正確に番号案内をする努力にプロの意識の高さを感じました。

試行錯誤の模索状態からスタートした研究生活ではありましが，すばらしい出会いの中で充実した研究生活を過ごすことができたことに感謝しています。６ヶ月間，島尻教育研究所で学んだことを糧に，今後も努力を忘れず，学び続けていき，未来を担う子どもたちの可能性を伸ばして，育んでいきたいと思います。

最後になりましたが，いつも，温かいご指導，ご助言をくださった比嘉恒雄所長，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事，指導講師の金城恵子先生，また，このような研修の機会を与えてくださった関係各位のみなさま方に感謝を申し上げます。

お互いを磨きあう島尻教育研究所

－　研究所の一日　－

与那原町立与那原東小学校教諭　**金　城　淳　子**

１０月１日の朝，「今までとは変わった出会いがあり，その日から新しい仲間との付き合いが始まりました。家族として付き合い，お互いがお互いを支え合って頑張ってください」と所長の話がありました。１５期生として出会った６人の仲間たちと早く打ち解けなくてはと思いました。長期の研修は初めてで，のんき者の私にやり通せるだろうかと緊張と不安の中でスタートした研究所生活。長いだろうと思っていた６ヶ月間もあっという間に過ぎました。何をどう進めたらよいのかわからず，迷い，悩み，落ち込んだ時もありました。でも，前期の研究員が残してくれた**「乗りこえて　もうひとつ　乗りこえていけたらこころが　きっと　強くなる」**の詩や研究員，比嘉恒雄所長，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事のやさしさと笑顔に励まされ，報告書を仕上げることができました。

研究所の始まりは，掃除からです。８時１５分より研究室・図書室・会議室・廊下・駐車場と分担をし，輪番制でやります。特に，駐車場は広くて掃いても掃いても，落ちてくる枯れ葉に悩まされ，ため息が出ることもありました。それでも，掃き掃除をしながら，両指導主事との会話もはずみ楽しいひとときでもありました。時には小鳥のさえずりも聞こえ，すがすがしい，ゆったりとした朝のスタートです。

月曜日，水曜日，金曜日は，ミーティング。火曜日，木曜日は，情報交換です。日程の確認や諸連絡の他に，教育問題や新聞記事を話題にし，いい話がたくさん聞けました。ミーティングでは，比嘉所長の琉球の歴史などユーモアを交えての講話があり，沖縄の偉人や出来事について楽しく学びました。

午前は，両指導主事からの所内研修，午後は，各々の研究テーマに沿って理論研究を深めたり，学校へ行き，検証授業の準備をしたり，研究内容をまとめたりしました。

金曜日は，１３時から１４時まで，クラブの時間があり，上原主任指導主事の丁寧な指導の下で三味線の練習をしました。工工四の読み方を教えてもらい「安波節，四季口説，秋の踊り」の三曲を研究員，心を一つにして頑張りました。

この６ヶ月間の研修中，いろいろな方々に教えられ，励まされ，反省もさせられました。また，初心に戻り落ち着いて，物事を考える時間を持つことができました。所長をはじめ，上原主任指導主事，宮城指導主事には，学校現場での課題をどう見つめ，どのように解決していくか，研究の視点のつかみ方など的確な助言をいただき，また，温かく励まし，丁寧にご指導してくださいました。特に指導講師の宮城貞子校長先生には大変お世話になりました。親身になって適切な指摘やアドバイスをしてくださいました。また，教師として，人間としての生き方も教わりました。学校現場では，体験できないことをたくさん研修することができました。最後に，研修の機会を与えてくださった関係機関の皆様，快く研修に送り出してくださった校長先生，教頭先生，諸先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

励まし合って　学び合って

－　検証授業までの取り組み　－

玉城村立百名小学校教諭　**嶺　井　のぞみ**

10月に研究所に入所して，多くの出会いや学びがありました。特に，幼稚園から中学校という校種の違う検証授業はとてもためになりました。そこで，検証授業に至るまでの取り組みを振り返ってみることにしました。

研究計画検討会

研究所生活が始まりすぐに取り組んだのは，３週間後の研究計画検討会に向けての研究計画レポート作成でした。研究計画検討会では，所長や両指導主事，各研究員とテーマについて（サブテーマとの整合性）やテーマ設定の理由（研究の概要がつかめるか）・仮説（具体的で検証できるか）について検討しました。

指導案検討会

テーマと仮説が明確になると，検証授業準備での実態把握のためアンケート作成や指導案作成に取りかかりました。事前授業をしたり，授業の打ち合わせや準備で学校に行く回数も増え，次第に慌ただしくなりました。私は地域素材を扱ったので，ボランティアティーチャーを見つけてお願いしたり，体験学習の日程を調整したりするのが勉強になりました。指導案検討会では，所長や両指導主事から迷っていたところへの的確な指導助言を頂き，また，各研究員から様々な意見や質問を受けることで自分だけでは気付かなかったところが見えてきました。

検証授業

検証授業当日，授業者以外の研究員は「抽出児童の観察」「学級全体の観察」「教師の活動の観察（発問，行動）」「ビデオ」という視点を毎回分担し，授業を観察するので授業を見る目が鍛えられました。研究所に帰っての授業研究会では，所長，指導講師，両指導主事からのきめ細かい指導助言を頂き，研究員からは視点別の感想，意見，質疑を聞くことができました。おかげで授業を分析し，改善していく方向性が少しずつ見えてきました。

○　生活発表会ごっこで，幼児が感じたことを素直に自分なりの言葉で表現することを大切にしていた長嶺初美先生

○　公園を利用しているゲストティチャーを招いて話を聞いたり，インタビューをしたりして公共のルールとマナーに気付く支援をしていた金城淳子先生

○　驚きや疑問，好奇心をくすぐるような資料提示や，ゲストティーチャを活用し児童を授業に引きつけた与那嶺正子先生

○　総合的な学習の時間で，見通しをもった課題づくりを目指し，楽しそうに児童と触れ合っていた上原康秀先生

○　基礎的・基本的な内容の定着を図るために，問題解決的な学習とオープンエンドな問題に挑戦した神里美智子先生

○　コンピュータを使っての作図で生徒の興味・関心を引きつけ，主体的に課題解決しようとする意欲を高めた唐真清先生

以上，研究員は検証授業をすることで，具体的な研究の視点が明らかになりました。この６ヶ月間の研修で励まし合ったこと学び合ったことを宝物にして，これからの教育実践に生かしていきたいと思います。

最後になりましたが，温かく指導助言をしてくださった比嘉恒雄所長，指導講師の武内典子先生，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事，そして快く研修に送り出してくださった校長先生をはじめ職員の皆様に感謝するとともに，研修の機会を与えてくださいました関係者の皆様へ心よりお礼申し上げます。

一つ一つの山を乗り越えて

－　入所式・研究計画検討会・中間検討会・研究報告書検討会　－

与那原町立与那原小学校教諭　**與那嶺　正子**

入所初日，研究室に入っていくと，コスモスの花とトンボの壁面に秋の雰囲気を感じ，緊張した気持ちをやわらげてくれました。前期研究員の皆様の優しい心使いに感激いたしました。また，「乗りこえてもうひとつ　乗りこえていけたら　こころがきっと強くなる」の詩に目をとめたときは，励ましの言葉のようにも思えました。

入所式では，南部広域行政組合教育長金城政安先生のご挨拶をはじめ，島尻教育事務所長の金城弘一所長の「新指導要領が完全実施されようとする学校教育の変革の時期に研修の機会」を得たことへの激励の言葉。比嘉恒雄所長より，教育や教師の原点にふれ，「三人行えば必ず我が師あり」という研究所の基本方針を基に切磋琢磨してお互いから学んでいくことを大切にしてほしいと言う言葉に身が引きしまる思いがいたしました。

忙しい学校現場を離れ，子ども達に後ろ髪を引かれる思いで入所してきて，この日から新しい環境に身を置くことを現実に感じることができました。

ふり返ってみますと，研究所には研究計画検討会，中間検討会，研究報告検討会の「三つの大きな山」がありました。

研究計画検討会では，テーマ，テーマ設定の理由，研究仮説，研究内容についての検討がありました。研究員，両指導主事，所長の適切で客観的な指摘に感謝することが多くありました。「６ケ月でできること，間口は狭く，研究は深く。」との言葉を深く考え，見直すことになりました。特に自分のまだ充分に絞りきれていないテーマ，仮説について一人一人が課題を痛感させられましたが，これからの研究の方向性が見えてきました。

中間検討会は研究活動の中でも一番大きな山といわれ，テーマ，テーマ設定の理由，研究仮説，それをうけての検証授業，そして研究内容との整合性が問われました。１５分間で発表するのだがどうしても時間がオーバーしてしまい，時間内に焦点化して話す難しさを痛感しました。両指導主事からの細かい視点に基づく指摘や，所長の「子ども達の実態のおさえかたが重要なポイントになること，テーマとの整合性，徹底してこだわること，資料をアレンジする力が大切である。」との講評を受けました。

報告書検討会までの間，パソコンの操作を教え合いながらまとめることに取り組んだのは，研究所生活で一番充実した日々で，研究を深めることができました。理論を適切にまとめること，考察をわかりやすく的確に表現する困難さを痛感いたしました。中間検討会で指摘されたところの修正や，指導講師の指導や助言を受け，研究テーマから研究の成果・今後の課題までを１０ページにまとめることができました。

報告書検討会では，両指導主事から報告書の一枚一枚について細かく丁寧に指導がありました。さらに，見落としや，表現の不十分さに気づき修正をすることで，報告書としての体裁や内容が整ったものになりました。

この三回の検討会が研究所生活の大きな節目であったこと，その間に苦労したこともあり，お互いに悩みもあり，それをお互いで支えてきたことで充実した研究所生活を送ることができました。このように一つ一つの山を越えてこられたのも，比嘉恒雄所長，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事が導いてくださったこと，指導講師の先生方の温かい指導助言のおかげだと心より感謝いたします。また，このすばらしい研究の機会を与えてくださった教育委員会，南部行政組合の関係各位の皆様，所属校の校長先生方にも心より感謝とお礼を申し上げます。

「三人行えば必ず我が師あり」の言葉は学校現場でも言えることだと思いました。この研究の機会で学んだものをこれからの教師生活の糧にしていき，今までと違う自分を見つめながら，これからの学校教育の中に生かして行けるように努めていきたいと思います。

心にゆとり

－　「大切な話し」「三分間スピーチ」　－

糸満市立潮平小学校教諭　上　原　康　秀

研究所の定例行事に「大切な話」「三分間スピーチ」がありました。「自分の研究だけでなく『まとめて話す』『聞いたことをまとめて書く』の話し方やまとめ方もこの研修の中では，とても重要なことです。六ヶ月後はだいぶ力がつきますよ」との指導主事の話があった。思えば，職場においては，校長先生や職員からの話しも連絡事項以外殆どメモをとることなく聞き過ごしてきた。学校外への職場研修等においても校長先生が代表してお礼の挨拶をし，職員は参加するだけが殆どであった。教師という職業は子供・職員・保護者等話す機会が多いにもかかわらず「テーマを設け自分の考えをまとめて話し・書く」機会が少ない。このような学校現場の状況を見据えての「大切な話」「三分間スピーチ」なのかと感じました。

「大切な話」は，毎週水曜日の朝のミーティングが終わったあとに外山滋比古の家庭で知っておくべき教育のヒント「学校で出来ること出来ないこと」の小冊子の中から題材となるテーマを，提案者になった人が選び，題材文を読みます。読み終わった後に選択理由や自分の意見を述べ，続いて他の研究員，そして両指導主事，最後に所長がそのテーマに意見を述べるというような順序で進めていきました。勿論，意見を述べ合ったあとには研修記録に「まとめる」という仕事がありました。自分の考えをまとめて話すことの難しさを感じたというのが，今の心境です。

他の研究員が話している間に「自分はこのように話そう」と話すポイントを箇条書きにメモしていても，実際に話してみると話が脱線し始めに考えていたことと異なっていて，自分は一体何を話そうとしているのか支離滅裂になることがあったからです。他の研究員も同じような心境になったことが多かれ少なかれあったのではないかと思います。また，題材や提案者から述べて欲しいテーマによっては難しいコメントを強いられることもあり，これも研修の一環と捉えました。「三分間スピーチ」は，毎週金曜日のミーティングの終了後に行われました。「大切な話」と同じように提案者が話すテーマを決め，テーマに対する意見を他の研究員，両指導主事，最後に所長がコメントするというような進め方でした。「大切な話」と異なるところは，提案者の思い思いにテーマを決めることが出来たところです。自分の身の回りや新聞・テレビ等から話題になっているものをテーマに決めました。「話す」とは，おもしろいもので研究員それぞれの個性が見えてきます。自分の経験からコメントする人，テーマについて総論的に述べる人，意図的に笑いを誘おうとしている人，涙する人等様々です。普段見ることが出来ない側面を新たに認識することも多くありました。「話す」ことから「人」が段々見えるようになってくることを感じました。何も見えなかったことが段々見えるようになることは「身近」になることにつながり，やがて「仲間」につながっていきます。これが，これまで研究所に代々存在する同期会のネーミングとして表れてきているのだと思いました。我々第十五期生も「十五」にちなんで「いちごの会」と命名しました。この「大切な話」「三分間スピーチ」は，笑いあり，涙ありで「心にゆとり」をもたせ，さらに，素晴らしい「仲間」へとつながっていきました。

振り返れば，毎日が忙しく短かった研究所生活でした。次から次へとくる「大きな山」。一つ乗り越え，また，一つ乗り越える。乗り越えた山の数，それ以上に研究が自分自身の血となり肉となったことと思います。私たち研究員を温かく，研究に関しては厳しく指導して下さった比嘉恒雄所長，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事，いつも笑顔で熱心に指導して下さった辺土名清子校長先生，心より感謝申し上げます。また，研究所に快く送ってくださった潮平小学校の上地富雄校長先生，職員の皆さん本当にありがとうございました。研究員をはじめ，多くの人の支えで意義のある研究生活を送ることができました。研究所で学んだことを心に留め，これから実践に生かせるように努力していきたいと思います。

大いなる糧

―「所内研修」を通して―

糸満市立糸満中学校教諭　神　里　美智子

島尻教育研究所では，テーマを基にした研究とともに，「所内研修」「所外研修」「三分間スピーチ」「大切な話」等の研修が設けられていました。研究所では，専門性の向上を目指す研究と，一般的教養等を身につけ教員としての資質向上を目指す研修の，両輪を育む機会がありました。

所内研修では，比嘉恒雄所長や上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事による定例講話を始めとして，様々な方々から貴重なお話をきくことができました。

比嘉所長からは，「琉球の歴史」や沖縄の城址，またタイムリーな政治経済等についての講話をおききしました。回を重ねるごとに，新聞やテレビ等の情報においてふと目をとめる機会が多くなりました。様々な事柄の多方面との関わりについて考えることが増え，視野を広げる機会とすることができました。

上原主任指導主事からは，研究員の服務を始め，テーマを基にした研究の進め方についての講話をおききしました。さらに，三線についてもご教示いただきました。三線を自分の手で弾くことができるようになり，とても感動しています。子どもたちに，三線の音色の心地よさや沖縄の誇りある文化としての琉歌，古典音楽の素晴らしさを伝えていきたいと思います。

宮城指導主事からは，コンピュータの使用や資料検索の方法，個人研修や校内研修，さらに，総合的な学習や沖縄県の新学力向上対策についての講話をおききしました。教員として意図をもって子どもたちと接していく中で，その基盤となる内容について多く学ぶことができました。教育を図る上での指針となります。

両指導主事には，テーマを基にした研究につきましても，様々な観点からご指導いただきました。そこには研究に対する厳しさとともに研究員に対する温かさを感じました。

また，所長および両指導主事のほかに，様々な方々の各々の立場からの講話がありました。

応用教育研究所研究主事でいらっしゃる野原清先生からは，教育心理検査の意義や種類等のお話をきくことができました。それらの諸検査を用いることで，生徒一人一人や集団の特性を客観的に測定し，診断して指導に生かすことができることを学びました。

南部広域行政組合の玉寄長市事務局長からは，行政の立場から南部広域行政の組織や事業，経費等についてのお話をおききしました。その中で，研究所が南部広域行政組合すなわち14市町村の連携，そしてその間に関わってくださっている行政の立場の皆様により成り立っていることを知り感謝の念が募りました。研究員として，教育者として，ますますがんばっていこうと決意を新たにしました。

南部広域行政組合の知花賢正総務課長には，一日がかりで書の手ほどきをしていただきました。姿勢や基本点画等の基礎から始まり，研究員各々に手本も書いていただきました。書に集中した充実した時間でした。

その他，研究所では，所長や両指導主事，研究員との日常の語らいがあり，それもまたたいへん有意義であり，教養を深めながら，本当に心和む時間で，よく話に花が咲いていました。

島尻教育研究所での研修では，様々な方々の経験に基づいたお話をきくことができました。また，これまでにない経験をすることもありました。そのすべてが自分自身の内面を高める貴重な経験であり，生きていく上での大きな糧となりました。今後，ここで学んだことを多くの子どもたちのために生かせるようさらに研鑽を重ねていきたいと思います。

最後になりましたが，これ程有意義で充実した研修の機会を与えてくださったことを関係市町村の方々を始め，南部広域行政組合の皆様，比嘉恒雄所長，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事，垣花義孝糸満中学校長，さらにご講話いただいた玉寄長市事務局長，知花賢正課長，野原清志先生，そして研究についてご指導くださいました大城盛幸指導講師，また，研修を支えてくださった多くの方々に深く感謝を申し上げます。本当に有難う御座いました。

みちのく紀行

－　県外研修　－

豊見城村立豊見城中学校教諭　唐　真　　清

研究所に入って最初の関所である「研究計画検討会」をなんとか越えての県外研修。入所式から検討会までの張りつめた空気が嘘のように研究員の顔も一様にほっとした様子。出発前に宮城末義指導主事から「前期までの研究生もこの県外研修でうち解けるようになって，研究生活がスムーズにいくようになりましたよ」という声かけもあり，楽しみにしていました。その言葉通り，旅行中は色々な出来事やハプニング？があり，研究員の絆も深まりました。以下はその珍道中の様子のほんの一コマをまとめてみたものです。

10月23日（火）　那覇→青森

出発時刻が遅れた青森行きの機内に突然のアナウンスが・・・『青森空港が天候不順のため着陸できない場合は当機は函館空港に向かいます』？？？これから始まる道中の行方を暗示しているかのようであった。しかし，これぐらいでめげる十五期生ではなく，飛行機が無事に青森空港に着くと，U研究員が一言，『このまま函館空港に行った方が面白かったなあ』さすが強者。

小雨降る中，棟方志功記念館を出て一路竜飛岬へ。青函トンネル記念館では工事に携わった人々の苦労をしのびつつ，竜飛岬ではその冷たい空気に身を震わせながら対岸に見える函館の街灯りに感激しました。ホテルでは，夕食時に研究員が「ねぶた踊り」を踊っていると，隣の部屋からは懐かしい？沖縄訛りの言葉が聞こえてきて「ドキッ」としたものです。また，その後のカラオケでは「沖縄のパワー」を十分に発揮し，友好団としての役割を無事に果たして他県との交流を深めることもできました。

10月24日（水）　青森→岩手

おそらく，U主事が最も期待していたであろう三内丸山遺跡では，丁寧なボランティアガイドさんのおかげでその当時の建築物や生活の様子を詳しく知ることができました。その中でも特に，草の茎や葉で編まれた世界最古のポシェットにはその精巧さに驚かされました。

ねぶたの里の後に訪れたリンゴ園での待ちに待ってたリンゴ狩りでは，リンゴをもいでは食べ，食べてはもいで，と大忙し。昼食前だというのに大丈夫だろうかと心配されるほど。

奥入瀬渓流ではその自然美にすっかり魅了され，川のせせらぎに耳を傾けながら紅葉に囲まれて歩くという贅沢なひとときを過ごしましたが，そんな中，女性陣は赤や黄に色づいた綺麗な葉を熱心に拾いながら歩いていたのが印象的でした。どんな時でも教育や生徒のことを忘れないその姿勢に頭が下がります。

10月25日（木）　岩手→仙台

高村光太郎記念館，宮沢賢治記念館では両人の才能に感動し，中尊寺，毛越寺では歴史の深さに感動させられとなんだか食べ慣れない高級なものを食べてしまった後のような消化不良状態に。

夕刻にたどり着いた仙台城跡ではなにやら周りがせわしく，あの有名な伊達正宗像にはなぜか提灯がかけられて，照らされていました。事情を聞いてみると，翌朝の「めざましテレビ」のロケの準備で，先ほどまで例の某有名キャスターも現場にいたとのこと。この旅行での唯一の後悔をこのとき味わいました。

10月26日（金）　仙台→那覇

日本三景の一つに挙げられる松島では，その風景を優雅に遊覧船で味わうはずだったのですが，気がつくと甲板に出て，飛んでいるカモメにえさを手渡して喜んでいる研究員。

羽田空港では旅の疲れも感じさせずに出発のぎりぎりまでお土産を探しまわっているある女性研究員のタフさにまたまた感心させられました。そのパワーの源はいったいどこにあるのでしょうか・・・

最後になりましが，比嘉恒雄所長をはじめ，上原幸得主任指導主事，宮城末義指導主事というよき指導者に恵まれて充実した研究所生活を送ることができました。また，忙しい中，指導講師として研究の指導をしていただいた与那原中学校の池村康男先生，快く6ヶ月の研修に送り出してくださいました豊見城中学校の比嘉裕起校長他，諸先生方と六ヶ月間にお世話になった多くの皆様に心から感謝いたします。

21世紀をめざす教育新生の課題と展開

教育講演会要旨

－自ら学ぶ子どもをどう育てるか－

期日：平成14年2月7日（木）
場所：佐敷町シュガーホール
講師：ベネッセ教育研究所顧問
高　階　玲　治

４月から新しい教育が始まりますが，実は新教育課程ということで考えてみると今日本の教育は非常に大きな矛盾にぶつかっています，まず，そのあたりからお話を申し上げます。４月からですが，教育内容を３割削減します。これは今回初めてではありませんで20年前ゆとりと充実というそういう課題が出されましたときも２割削減しておりました。このように学校教育は縮小するあるいはスリム化するというのが新年度からの学校教育の態勢です。しかし，この学校教育を縮小するという方向は，これからの日本の教育を考えると全く逆の方向に進んでいます。ご承知のように，これからは国際化，情報化，科学の進展等，様々な点で世の中が大きく変わっていきます。実は，生涯学習社会と言われるように，教育はこれからどんどん拡大していくような方向に向かいます。それにもかかわらず学校教育だけが縮小しています。スリム化すること，そこに大きな矛盾が起きると考えて欲しいです。将来の子どもたちはこういう世界で生きます。しかし，学校教育はこんなに小さくなります。そうすると，小さくなった学校教育がどういうようなことであれば将来に向けた子どもたちに力を付けられるか。学校教育が少なくなりながら将来に向けた子どもたちにどんな力をつけられるかということが大きな課題になります。これだけで見るとあんまり実感がないと思いますが，小学校の理科や中学校の理科の例で時間数がどのくらい減ったかということを話します（図１）。時間数というのは現行の学習指導要領に基づくものではなくてもっと前，20年前，今の子どもたちのお父さんやお母さんの時代，その時代にどのくらい理科の勉強をやっていたか，先生方も20年前，小学生でしたでしょうか。中学生でしたでしょうか。小学生だとすれば理科が１週間にどれくらいやってましたでしょうか，中学生でどれくらいでしょうか。ちょっと比べてみることにします。これからは，小学校の理科は350時間(図2)になります。ところが20年前は628時間やっていました。４割減ります。中学校は，290時間なります。でも，20年前は420時間もやっていました。４割も減ります。こんなに授業時間が少なくなって，内容が減って学力をきちっと維持できるのでしょうか。それがこれからの大きな問題です。だから今の中学生，高校生はこういう時間を考えていなくてもお父さんやお母さんの世代を越えられないといわれています。そのように考えている子どもたちがたくさん増えてきています。こんなにちがいがあ

告示年度		1958	1969	1977	1987	1998
小学校	1年	102	102	136	136	114
	2	140	140	175	175	155
	3	175	175	175	175	150
	4	210	210	175	175	150
	5	210	210	175	175	150
	6	210	210	175	175	150
	計	1047	1047	1011	1011	869
中学校	1年	140	140	105	105	105
	2	140	140	140	140	105
	3	105	140	140	140	105
	計	385	420	385	385	315

図１　小中学校算数・数学の年間授業時数の変遷

告示年度		1958	1969	1977	1987	1998
小学校	1年	68	68	68	——	——
	2	70	70	70	——	——
	3	105	105	105	105	70
	4	105	105	105	105	90
	5	140	140	105	105	95
	6	140	140	105	105	95
	計	628	628	558	420	350
中学校	1年	140	140	105	105	105
	2	140	140	105	105	105
	3	140	140	140	105～140	80
	計	420	420	350	315～350	290

図２　小・中学校理科の年間授業時数の変遷

ることからおそらく子どもたちだっていやこれでお父さんやお母さんの勉強したあの時代を越えられるかというように考えるのも当然です。しかし，教育というものは，実は親の世代を乗り越えていくからこそ教育です。親の世代の前にとどまっているのであれば，教育ではないです。教育は，いつでも未来に向かって進まなければならないから親の時代を超えてくれなければいけない。それなのに今，こんなに時間数が減って学力低下を来たすのではないかというような心配があります。しかし，文部省では，ずっと前から日本の子どもたちの学力が低下するということは認めてきませんでした。年が越えましたから，２年前の話ですが，99年の12月８日の新聞に”中２学力低下はせず”というように文部省が言っています。当然文部省もでたらめに言っているのではなく根拠があって言っていることです。国際学力比較というのをやっています。この間，ＯＥＣＤでやったのは単発的にやった比較なのでそこのところではなくて，私がいた国立教育研究所が日本を代表して比較調査をやっているというのがあります。中学校の理科と数学を主にしてやっていますが，日本の中学生の学力が世界に比べてどのくらいのレベルにあるのか考えてみたいと思います。日本の子どもたちの中学２年生の理科と数学ですが，日本の学力は世界でトップだと思う人はいませんか。２番目か３番目かと思う人，５番目か６番目だと思う人，あるいはもっと低いと思う人。トップでない１０番目以下でないその中間であるということですか。その調査結果が１番新しいのですが，４回目ですけど，去年の11月に出ました。見てみますと，日本は２年前３位でしたが，今回５位になりました。理科は，３位だったのが４位になりました。少しランクを落としていまして実はこれには理由があります。台湾を見てください。台湾の国は，４回目で初めて参加したのです。初めて参加して理科で１位になりました。そして数学は，３位になりました。こういう初めて参加したのが上にきたものですから，ひとつずつ日本はランクを下げてしまいました。そこで文部省は日本の学力は下がっていないというように言ったのです。

しかし，問題は次のことです。”数学ぎらい過半数，理数離れくっきり”そういう問題が出ているのです。そこで，実は日本の教育の中の問題，１７カ国の中で最下位になっているのです。一体これは何なのか。これは，理科を生活の中で大切と考えている生徒が最下位です。科学を使う仕事をしたいと考えている生徒の割合も最下位です。学力はその当時３位でありました。３位だったのにこの調査結果を見ると最下位になっています。この３回目の調査のときにトップだったのは，シンガポールでした。そのシンガポールは，理科を生活の中で大切と考えている生徒がこのように高いのです。非常にノーマルです。アメリカは調査をやってみると学力は，ずっと低いのです。低いけれどもこういう調査をやってみると日本よりはるかにいいのです。日本だけは，学力は高いけれどもこういう調査結果をやってみると低いのです。さらにまた，理科が好きかという生徒の割合も最下位です。こういう状況が続いているのです。この結果どうなるのか，最近，日本青少年研究所の調査でわかったことですが，「高校生が学校を帰ってから自分で勉強するか？」調べてみたら，アメリカや中国と比べて全くしないというのが多く４割です。２時間以上から３時間勉強するというのは，中国は６割です。日本の場合は，両方合わせて１割５分です。中国の方が日本の高校生よりも４倍も勉強している生徒の数が多くなっています。これは単に４倍ということではないです。中国の人口は，簡単にいうと日本の１０倍です。つまり，数でいうと日本の４０倍にあたります。このように考えた方がいいです。中国は，まだ高校に行くのが少ないですからそのとおりではないのですが，このままでいくと日本の学力は中国にどんどん負けてしまうのではないかという危機感があります。その問題をどう考えたらいいのでしょうか。

実はその前に考えたいのは，日本の子どもたちは一見学力は高い，それなのになぜ生活に関係ないと考えるのか，将来生きることと関係ないと考えるのか。そういう問題についてどう考えていくかということを私たちは考えなければいけないのです。そこで少し難しくなりますが，私たちは子どもたちに学力を付けたいというように考えて，一生懸命勉強させようと思っています。学力に対してはいろんな考え方があって定義がなかなか決まっていないですが，実は学力というのは，学校で学んでいるときに使われる言葉です。大人になってから学力ということを使うということはありません。例えば先生方，どんなに優秀な先生，字の上手，生徒指導が上手，そういう先生に対してあなたは学力がありますとはいいません。社会

に出て仕事をしている，技術者がいる，そういう人に対してあなたは学力がありますとはいいません。例えば，沖縄そばを作るお店のおじさんに向かってあなたは学力がありますとはいいません。学力というのは，せいぜい学校で学んでいるその状態を指します。しかし，本当に必要なものは何かというと社会に出てから生活の中であるいは何らかの形の中で使える力，つまり，学校で学んだ力，知識だとか能力以外にです。社会に出てからそれらを活用できる力が必要です。そのことを知性とか知力といいます。そいうものが人間にとって必要なのです。残念ですが，学校は簡単にそこのところはつけられませんから知識を与えようとします。その知識の与え方が問題ではないかというのが一つあります。それは，知識の与え方にはふたとおりあります（図３）。一つは「形式知」といいます。この「形式知」というのは，例えば教科書を通して学ぶようなことですが，先生方は子どもたちを教科書で教えるときに「教科書は誰が書いたか」と考えて教えていることはありません。教科書の内容だけを伝えればいい。そういう点で教科書は人に伝えることに便利にできています。マニュアル化されています。そこで，北海道から東京，沖縄までみんな同じ教科書を使いながらそのことを伝えればいいと思っています。しかし，教科書を書いた人間がいて教科書の後に奥付に名前が書かれて載っていますが，その人達はやはりこの教科書をこのように使ってほしいという思いや願いがあると思います。しかし，それは全部忘れられていきます。むしろ，そのような人たちの思いや願いが強すぎるとこれは個性的な教科書ということで削られていきます。結局は，教科書に載っている内容が知識としてどんどん子どもたちに教えられていく結果として，その中身は「生きる力」に関係ない，生活に関係ないというようなそういうことが起きてきます。先ほどのように，学力は高いのですが，せいぜい落ちても４番目から５番目です。しかし，その算数なら算数，数学なら数学，理科なら理科のようにその勉強はあまり好きではない。そういう勉強は生活に関係ない，将来に生かすことも考えない。そういうことにつながっていくとすればそれは知識というのは何の役にも立っていないことになります。ある大学の先生が春に難しい入学試験に受かって入学した大学生達に，入学試験の時と同じ問題を１年半経ってからやらしてみたということがあります。すると，入学試験の時はきちんとできていたのに１年半も経ったら半分もできていなかったということです。だから「形式知」というのですが，どんどん剥げ落ちてしまいます。「知識とは一体何でしょうか？」ということを反省しないといけないのです。ところが，わが国の教育は，実は「形式知」を子どもに教えるということで非常に偏りがあるのではないか，むしろ，もうひとつの知の学びの世界を作ってあげることが大事ではないかと考えます。

もうひとつの知というのは何かというと「暗黙知」というものです。初めて聞く人がいるのかもしれませんが，「暗黙知」という言葉を覚えてください。「暗黙知」というのは，人に伝えにくい言葉です。つまり，知識です。しかし，成長していくときにどうしてもいろんなものとかかわりを持ちながら身につけていってそして，身に付けていくと離れがたくその人間につながっていって人間的な成長に大きな力をもたらすものです。例えば，泳ぎを覚えるというのがあります。泳ぎを覚えるということは，教科書に書いてあるから教科書を読めば，泳げるようになるということは全くありません。やはり泳ぎを覚えるには，プールで泳ぐ，海で泳ぐということをやって自分で手足を動かしてこうやれば身体が浮く，こうやれば前に進む，こうやればスピードが出るということを体得していくものです。そのようにして泳ぎを覚えていきます。その時，その子どもが小学生の頃泳ぎを覚えて中学校，高校，大学と泳ぐ機会がなかったとき，若者になって友達と例えばサンサンビーチに行って泳ごうといったときに，小学生の頃しか泳いだことがないんだと言いながら海に入ってちゃんと泳げるのです。身に付いたもの体得したものは剥げ落ちていかないものです。そういう点で，体得する知は大事，体験が大事，感性を磨いていくことが大事という点で日本の教育は「形式知」に偏よりすぎています。そういう「暗黙知」の世

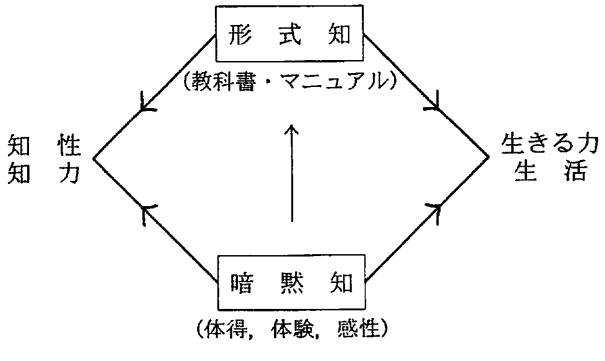
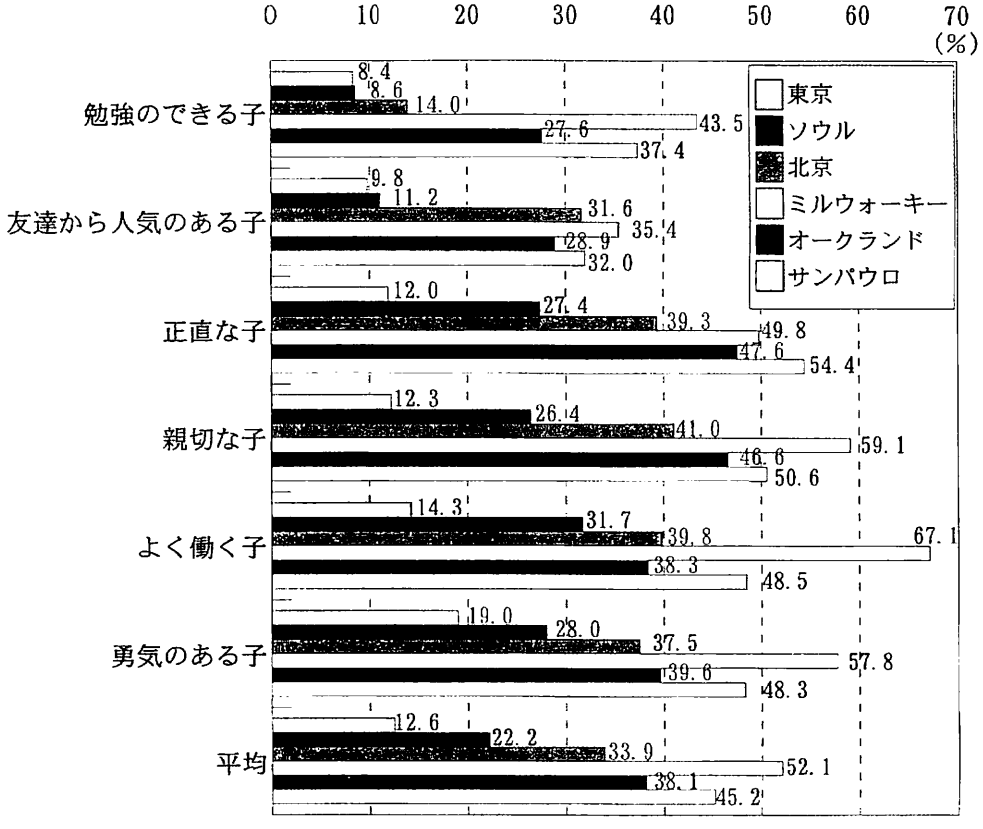


図３　形式知と暗黙知

界を開いてやる，そういうことがこれから大事になってきます。それが本当の「生きる力」あるいは生活に変わる力，あるいは知性や知力として磨かれていくものです。ただし経験というのは，そんなにたくさんできることではないものですから「形式知」も大事です。だから「暗黙知」と「形式知」のバランスのある教育というのをこれからの子どもたちに与えてやるそのためにはどうすればよいか，考えていく必要があります。そういう点では，「暗黙知」というのは，自分から進んで学ぶというのが第１条件です。

ところが，日本の子どもたちには非常に弱点があります。ベネッセでやった国際比較調査（図４）です。東京，ソウル，北京，ミルウォーキー（米国），オークランド（ニュージランド），サンパウロ（ブラジル）の５年生にいろいろアンケートをとってみました。直接子どもたちにアンケートをとってみました。子どもに向かって「あなたは自分のことを勉強ができると思いますか？友だちから人気があると思いますか？正直だと思いますか？親切な子どもだと思いますか？よく働くと思いますか？勇気がある子だと思いますか？」そうすると，イエスと言った日本の子どもたちは１割前後です。ほとんどの日本の５年生は，自分のことを勉強ができると思っていないのです。友だちから人気があると思っていない，正直だと思っていない，親切だと思っていない。よく働くと思っていない。勇気があると思っていないのです。非常に情けないような状況です。これがほんとかと思って実はつい先週ですけれども，寅さんで有名な東京の葛飾区の柴又その小学校の子どもたちに調査をしたものを見せてもらいました。そしたら柴又の子どもはこの傾向と全く同じでした。どうして日本の子どもは評価が低いのだろうか。「自尊感情」，自分にはいいところがあるというところを認める，そういう気持ち，「自己肯定観」，自分のやっているところを認める気持ち，そういうのが日本の子は欠けているということですね。それに対して，外国の子どもたち，アメリカの子どもたちだけでなくて，オークランドの子ども，サンパウロの子ども，そういう子どもたちはこんなに高いのです。

なぜ，外国の子どもは自己評価が高くて日本の子どもは低いのか，日本の子どもたち自身の問題だろうか，それともそういう日本の子ども達を取り巻いている周りの環境が日本の子どもをそうさせているのだろうか。そういうことを考えなければなりません。今の日本の子どもは何か上からおさえられていて，それで何か自分の本当のやりたいことを見いだせなかったり，あるいは自分でこうしたいということでやってみても自信を持てなかったりするのではないか。そういう自



(注)　各国約300～2,000人の小学校５年生（11歳の子ども）を対象に調査
資料　「子どもにとっての教師」（1997年・ベネッセ教育研究所）より

図４　小学生の自己評価（自分が次のことに「とてもあてはまね回答した者の割合」）

分から進んで学ぶという世界を作ってあげないといつまでたってもこういう状況のまま，ずっと大人になってしまいます。そういう感じがします。小学校５年生がこういう状態で中学生に行くわけです。中学生は教えにくいのです。中学生からは自発性を育てにくいのです。高校にいってもやっぱりこういうことであれば高校でも教えにくいのは同じです。そういう状況が続いているということです。こういう状況を変えなくてはいけない。何だろうか？まあ，いろいろあるかと思いますが，子ども自身にも問題があるかと思いますが，子ども自身をそのまま自己評価が低いままにさせておく社会全体の空気もあるのではないかと思います。例を挙げますと，羽田の飛行場でのレストランに入ったのですが，あのようなレストランは非常に狭いので，隣が何を食べているのかすぐわかってしまいます。私が食事をしている隣で４つぐらいの男の子と若いお母さん２人が来て何を注文するのかと思いましたら，男の子が枝豆としゅうまいを注文し，お母さんはラーメンを頼んでいました。お母さんは自分だけ食べるのではなくて，その子によそおってあげるために，小さなお椀が必要です。枝豆を食べるとその殻を捨てなければいけませんから，また他のお椀が必要ということでその男の子が少しそのことに気がついて，お母さんに話をしているのです。お母さんが「あーそれはそうだね，こうだね」と，わぁーとその子の話をとってしまいました。少したつと，男の子が少ししゃべりまして，そしてまたお母さんが「あーそれはそうだね，こうだね」とまた話をとってしまいました。そのとき，はっと思いました。これはレストランだからそうなんだろうか，お家にいてもいつでもこのようにして何か子どもがやろうとするとわぁーと抱え込んでしまうのではないでしょうか。「あーしなさい，こーしなさい，あれしてはいけない，こうしちゃいけない。そういうようなことをやったのではないか」と，そう思いました。これは極端な例かもしれませんが，子どもがせっかく自分からやろうとするのにそれを周囲が囲ってしまったり，お母さんは何も自分が悪いと思ってないのではないかとそれもまた問題ですけど，そういうような状況で子供たちを伸び伸び過ごさせていないのではないかと感じました。その結果どうなるか，いろいろ問題が出てくると思います。まずは，指示待ち傾向です。自分がやる前に「あーしなさい，こーしなさい」と待っています。だから自己決定がなかなかできなくなります。決めるのはお母さんだとかお父さんだとか，そういうことを考えています。ずっとそのまま成長して学生になります。関東地方の有名な大学の教授ですがすごく嘆いていました。何を嘆いているかといいますと，最近の学生は飲み会をやっても全然議論しないといいます。ぺちゃぺちゃと男子学生たちが女の子の話をしています。議論しないと言っても何か大事なことがあったら議論して決めるのではないですかというと，それでも議論しないそうです。何で決めていますかと聞くとなんとじゃんけんで決めていますと言っていました。それくらい議論して決めることができなく「自己決定能力」は落ちています。自己決定が弱くなっています。従って「チャレンジ精神」もないことになります。さらにまた，「対人関係能力」も非常に劣ってきています。こういうことをやっていますから，「自我の成長」も遅れていきます。「自我の成長」に関しては，こういうことがあります。アメリカの大学にハーバード大学があります。雅子さんが入った大学ですが，そこで教えていた先生が東京大学にきたので東京大学とハーバード大学の学生はどう違いますかと聞いてみました。ハーバード大学は非常におもしろい大学で日本人から何名，ドイツ人から何名，オーストラリア人から何名というように学生を選びます。なぜそういうことをするのかというと，例えばハーバード大学を卒業したアメリカ人が日本へやってきます。そうすると日本はハーバード大学を卒業した同じ仲間がいるのではないか，ドイツに行っても仲間がいるのではないか。そうするとインターナショナルの仕事が非常にしやすくなります。そういうようにして学生を選んでいます。それはアメリカの政府が決めたのではなく，その大学がポリシーとして決めています。そういう大学の学生と東大生はどう違いますか。アメリカでは日本のような試験はしません。試験は別な形でやってそれで上位の者を選んでいくのですが，あとは先生が大変ですが一人一人面接します。そして何人かの教授でこの学生は魅力があるということがあれば選ぶ学生が個性的であるからそういうときに選ばれる学生も個性的になります。何を聞くかというと「ここに来る前にどんな経験をしたか？大学に入って何をやりたいか？社会に出てから何をやりたいと思っているか？自分の言葉でしゃべれるような学生であれば魅力ある学生だということで入学させます。だから，非常にハーバードの学生は個性的です。」と言っていました。東大の学生

はどうですかと聞いたら「東大が試験で入れるためにみんな同じように見えます。」と言いました。その次に決定的なことを言ったのは「東大生の方が幼く見えます。」と言ったのです。受験勉強ばかりやって社会経験ないままに東大に入ってくるわけですから，そういう点では決定的な違いがあると思います。その東大での人間たちが例えば外務省で何をやるかというとこれはまた別な問題になってしまいます。そういう循環が日本の社会の中にはあると思います。今の状況が子どもたちの中に蔓延していると考えた方がいいのです。これを変えていくようなことが必要です。

そこで，先ほど日本の子供たちが親の世代を超えられないと話しましたが実は，超えられるものがあるのではないかと私は思っています。一つは何か，これはすでに超えているかもしれませんが，今の子供が親を超えているものそれは「コンピュータ操作能力」です。これは将来的にもどんどん進んでいきますから超えるでしょう。うまくいけばですが，２つ目は，「英会話能力」です。実は今度の教育課程改善のときに外国の教育課程はどうなっているかということで，私は韓国のことを調べに韓国に行って調査しました。1997年から小学校３年生に英語を週２時間ずつ導入すると言っていました。韓国の教育課程の委員である中学校の校長先生に聞きました。修学旅行で韓国に行く日本の高校生がいます。韓国語がわからないから英語で話します。韓国も日本語がわからないから英語で話します。そういう会話を聞いているとどうも韓国の方の高校生が抜群に英語の力があるみたいですがどう思いますか？と，聞いてみました。すると，校長先生は「日本の英語教育が悪いからです，韓国も前はそうでした。それを韓国は変えました。だから今３０歳少し上でそれ以下の韓国の人たちは昔に比べるとかなり英会話ができるようになっています。」そこで，やり方を変えることで日本の英会話の力が伸びることが期待されます。もう一つあります。これから親の代を変える力，それは「問題解決能力」です。「問題解決能力」は知識であるとか能力であるとかそういうものを自分で使いこなしてそして何か問題があったらそれに対してどのようにやっていけばいいかということを身につけていく力です。単なる知識だけの学力ではないです。言ってみれば知力のようなものです。今，非常に若者が社会に出ていますが残念ながら，「問題解決能力」があるとは思いません。問題処理能力は非常に優れている人間がいます。私の会社も女性の中に問題処理能力を持っている人がたくさんいます。しかし，「問題解決能力」となると首をかしげざるをえないということがたくさんあります。でもこれからの子は，努力すればそうなるかもしれません。少し先回りをして言うと，「総合的な学習の時間」をなぜ設定したのか？ここにヒントがあります。総合的な学習は，まず自己決定をします，課題は自分で見つけます。そういうことを徹底して教えることです。これが基本です。今では教師が教科書にこういう問題があるからこれをやりなさいとか言いながら課題を与えていました。ただ与えられた課題をやるものだと子どもは思っていました。しかし，総合の場合は自分で課題を見いだす。その課題を見いだしたら自分で挑戦します。その課題は自分が好きな課題でいいということを，つまり自己決定とチャレンジ精神と両方を教えることが課題であります。しかも勉強する場所，それは地域にどんどん出かけていきます。地域の中の様々な問題にチャレンジしていきます。そうすると，地域の人たちの様々な出会いが起きます。地域の中の名人さんとの出会いもあるけれども，おじちゃん，おばちゃんとのいろんな人との出会いもあります。そうすると自然にそういう人との対人関係が生まれます。子どもは大人と出会うことによって対人関係の社会性が高まってきます。総合的な学習はいいところがあるなと思ったひとつに社会性の問題があります。これは今まで学校が抱え込み過ぎていました。そのために学校の中だけではなかなか育たないような力，そういうものが社会の中に存在するということがわかったのは，例えば阪神大震災，それから神戸では「さかきばら事件」があって，兵庫県ではトライアルウィークといって１週間，中学２年生を地域に出します。学校はノータッチです。地域の中で様々な活動をして，１週間たったら学校に帰ってきます。そうすると子どもたちが違ったそうです。先生がびっくりするほど生徒の顔が引き締まって帰ってきたそうです。しかも，今までちょっとトラブッたことがあったらぶつぶつ文句を言っていた子どもが，そんなことは気にならない。そんなこと言い出したそうです。社会に出ていろいろと地域の人と出会っていると，もっとすごい厳しいことがたくさんあります。それに比べると学校や学級の中の小さいトラブルは問題ではないと，いうように考え始めています。そこで，「今奉仕活動やりましょう，ボランテ

ィア活動やりましょう」と，言われているのは，やっぱりそういうことの反映です。埼玉県では，１週間ではないけど３日間，中学１年生が地域に出しています。そういう形で地域が学びの世界になってくると社会性，対人関係能力そういうものが身に付いていきます。このように大人になっていくわけです。人からあーだこーだと言われてやるのがいやになります。やっぱり自分でやりたいことをやろう，というように自分から進んでやるとだんだん自我というものが成長していきます。自我というものが作られてきます。学校の中だといつも同じ仲間，同じ顔の先生ではどうしてもわがままが出てきます。そういう社会の中にもまれることによって自分は地域からどう思われているか。社会からどう思われているか。下手なことをしたら叱られるかもしれません。何回言っても断られるかもしれません。そういうような社会の本物との出会いで成長していくわけです。そういう学びの世界を作っていこう，ということです。

実は今度の学習指導要領は，とてもいいことを示しています。新教育課程の改訂の基準の改善のねらいです。このねらいの１番目は豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること，人間性，社会性，国際性の育成です。それがキーワードです。この中で非常に注目する言葉がありますからそこのところをどう考えるかということで深く考えてみたいです。それは「自覚」という言葉です。「自覚」は，内面的な強い言葉の枠の中にあります。しかも，国際社会に生きる日本人としての自覚，こういう強い表現があります。これがねらいと出たときに聞いてみました。誰に聞いたかというとある県の指導主事200人ぐらいに聞きました。教育課程の改善のねらいが出ていますが，まず先生方，国際社会に生きる日本人としての自覚がありますかと聞いてみました。すると，たった二人だけしか手が挙がりませんでした。大人でも難しい問題です。これは，ちょっとたじろぎます。でも，これからの子どもにはそういう自覚を持たしてください。これは非常に大事なことです。豊かな人間性，社会性，国際性，そういうことを自覚して持つ，集団としての自覚ではありません。一人の人間としての自覚を持たなければならなりません。その次，自ら学び自ら考える力の育成ということは，一人一人が自ら考えるということで学習態度を形成するということです。３つ目，ゆとりのある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を充実すること。基礎基本の確実な定着ということは，今までは基礎的・基本的事項を重視すると言っていたことを書いたことは重要な変化です。重視するということは教える側の論理です。でも確実な定着とは，しっかり身につけるということですから，子どもが身につけなければ何の意味もないのです。そこで，一人一人の子どもにしっかりと身につけさせて下さい。今度の教育課程というのは，一人一人に自覚を持たせる。一人一人の学ぶ態度を作る。一人一人に基礎・基本をしっかり定着させる。みんな一人一人のところに収斂していきます。一人一人の子どもにそういう力をつけるということを使命にして，子どもと向き合っていくということが大事になっていきます。そうすると子どもと向き合うということは文部科学省は，できないことです。学習指導を決めることはできます。あるいはまた教科書を検定することはできます。しかし，一人一人を教えることはできません。一人一人の子どもに向き合っているのは誰なのか，それは学校の先生です。みんさん方です。そこでどうすればよいか。４点目，各学校が創意工夫を生かし，特色ある教育，特色ある学校づくりを進めること，つまり目の前にある子ども達にどういう教育がいいかということを先生方自身が考えてそのことを創意工夫を働かせてやって下さい。そこで，創意工夫というのは，全然別なことをやるのだとかということではなくて目の前にある子どもたちにベターな，ベストということはないからベターな教育をどう実現するかということで考えて欲しいです。その基本は①②③にあります。一人一人に人間性や社会性，国際性を自覚させること，一人一人に学びの力を付けること。そして一人一人にしっかりと基礎基本を定着させること。この３つをまずは考えて下さいということです。その点でこの新教育課程の改善のねらいは，非常に私はいいと思いますが，大きな問題が出ました。

実は，去年の４月でした。当時，町村文部科学大臣が教育新聞関係の人達を集めて，学習指導要領は最低基準である。勉強のできる理解の速い子は，例えば３年生の子であっても学習の状況によっては４年生のことを教えてもいい，５年生のことを教えてもいい，中学１年生のことを分かれば教えてもいいと言い出したのです。４月から使う教科書は全くそのように作られていないのです。学習指導要領に全くそのよ

うなことは書いていないのです。遅れている子には，当然ながら補充的な指導をやってもよいが，理解の速い子はレベルを超えてその上のことを教えてもいいということです。そのことで，今非常に大きな問題が起きています。この考えをどう受け止めたらいいのか。私たちが授業を展開するときに，ねらいやゴールを設定します。そのゴールを設定して子どもたちに今日の授業はここからだよと始めるのですが，実は子どもたちは40人いれば40通りのレベルにあります。みんなが例えば，運動会の徒競走のスタートに一列に並んでいるのではありません。理解の先に行っている子ども，スタートラインにいる子ども，遅れている子どもなど，様々です。授業を始めると，理解の速い子はゴールにすーっとやすやすと到達してしまいます。理解の遅い子どもは，時間が来てもゴールまで行かないで手前で止まってしまいます。これは日常的に起きていることです。ところが，一つ問題なのは，理解の速い子がゴールに行って，もっと上に行く力があるのに今までの考え方では，それ以上の勉強はだめですよと，おさえられていたわけです。先生方もそうは言いながら少しアドバイスをやっていたのではないかと思いますが，一般的にはあまり上に行くような学習はやられていなかったのです。今度，学習指導要領が３割減ります。内容が易しくなります。内容が易しくなると，Ａのような子どもだけでなくＢのような子どももゴールで足踏みさせられます。遅れた子はゴールに行きやすくなるかわりに，理解の速い子は足踏みさせられてしまいます。そういう子がどんどん増えてきます。それが問題ではないかと学力低下を批判する大きな声になってしまいました。どの子も自分の力相応の学習ができるようにそういうことが可能な学習がどうあればよいか。まずは，ゴールをきちっとしてそのゴールにあうような学習とゴールを越えてもよいような学習を考えようとそれが昨年１年間の間にどんどん強くなってきました。学習指導要領は何も変わらないのですが，その解釈が変わってきました。その結果，学習指導要領は今まで標準と言っていました。今は最低基準となって，そこまで到達することが望ましいという判断になってしまいました。その結果，文部科学省は，評価規準というのを作っています。評価規準というのは，単元と題材などの観点別評価規準が到達することが望ましいのです。４つの観点，関心・意欲・態度，思考，判断，技能，表現，知識・理解のこの４観点を示したわけです。この考え方というものは，ここまで到達してほしいという基準を明確しました。集団の中で自分がどの位置にいるかというものを相対評価をやめよう。目標に準拠した評価，絶対評価でやろうということです。絶対評価でやるときには，こういう基準というのがはっきりしないといけません。その基準がきちっとされていないといけないから，そのことで規準を決めようと考えたということです。ですから今度からは，学習指導要領のレベルがひとつの到達，達成しなけらばならない目標になることから，みんながそこに向かって学習していきます。そこのところをはっきり決めてどう評価するかということで，基準が決まります。しかし，最低基準というのは５いうのは変ですね。今までそこに到達すれば５だったことが，しかも，上が出てくることから，上の子どもが今までのように５が何％とか４が何％だとかそういうのではなくて何人出てきてもいいことです。もしかして半分以上超えてしまうことも出てきます。私は，５・４・３・２・１という評価も通用しなくなるのではないかと思いますが，ここまで到達した子どもは５ではなくせいぜい４でないかと思います。その上にいったのが５で，しかも，５というのは何人いてもいい。４が何人いてもいいということになります。このことは，まだ決着がついていませんが高校入試に関係してきます。来年の３月になりますと高校側がどんな対応をしてくるのか問題になりますが，まだ何にも決まっていません。考え方はこうです。できる子どもはどんどん進んでもいい。教科書を越える子ども達が出てきてもいい。それをみんな認めてやろう，という考え方を望んでいるわけです。そのときに，遅れている子も進んでいる子も学級の中でごちゃごちゃいるというのは教えるのも大変ではないかという問題が出てきます。そこで，文部科学省は少人数，習熟別学習を進めてはどうかということを言っています。Ａのような子ども達をＡ群とし，Ｂのような子どもの達をＢ群としＣのような子ども達をＣ群として，それぞれの学びの態勢に応じて先生を増やす学習集団を作ってはどうかという考え方です。しかし，そんなに先生方を増やすことはできません。今のところ何処に行っても，加配した先生方を増やしたのは算数ぐらいしかできていません。これが全ての教科にわたって増やすことはとっても不可能かもしれません。考え方とすれば，一人一人の力を伸ばしていくような方向で考えていこうとしていることは確かです。でも，

こういうときに世の中の見方は，がらっとまた変わります。そういう学力というのが，今度の新教育課程で間に合わないとなると，学校教育だけではだめではないかと考える親達が増えてくるということです。そうすると学校教育はもっと力をつけるような教育をやってくれないかというようなことを親たちが考えはじめたときに，遠山文部科学大臣はどんと新しい問題を出してきました。皆さんは新聞で読んでおわかりかと思いますが，学力向上を補習や宿題をやってください。もしかしたら，親たちがどうして宿題を出してくれないの，どうして補習をやってくれないのと，先生方に迫ってくるかもしれません。実は，私立，私学ではどんどんこういうことをやり始めています。公立学校でもこういうことをやらないとどんどん私学の方へ生徒が流れていきます。東京や大阪などでは，公立学校でも子どもに学力をつけるようなことをやってくれないと私学の方にどんどん流れてしまいます。公立は危機です。そういうことが考えとしてはあったかもしれません。これは，ちょっと大変です。特に補習は大変です。しかし，学校によっては放課後ちょっとやる学校やあるいは夏休みに希望する生徒を呼んで補習する可能性があります。昨日の新聞で埼玉県でやろうとする計画があります。ここで気をつけなければいけないことは，子どもたちが自発的に自分から学びの世界を作っていこうと考えたときに，補習だよ宿題だよと言ってまた教師が問題をどんどん子どもたちに与えて子どもたちの学びの姿勢をやっぱり与えられる学習の方へ帰してしまいます。そこが問題です。

そこで，私の考え方を言います。私も昔，小・中・高・大学を教えてきたわけですが，宿題の効果を考えますと，勉強は習慣形成と考えましたが，習慣形成は，子どもが学びを自分からやれるような習慣を作っていく，そういうことを子ども達に考えてやらせる。そこで，土曜日も日曜日も実はちょっと３０分でもいいからやるようなことで毎日やりなさいというような習慣形成の動機付けをします。実は，土曜日も日曜日にもせっかくの休みだから休んでもいいよと考えることがいけないのです。なぜかというと土曜日や日曜日やらないと月曜日がなかなかできないものです。毎日やっているとすーとやれることが１日でも休むとできないものです。井上靖という作家がいて毎日原稿を書いているそうです。奥さんが「正月くらい休んだらどう」と言うと「いや休まれないんだよな」と言ったそうです。それはなぜかというと正月の３日間休むとその次書くときすごいエネルギーを使わないと次の執筆活動に入れないそうです。そういうことでしたら，毎日少しでもちょっとやってたほうがいいです。本当にこれは確かなことです。毎日やらせるようなことで態勢を作っておきます。そのときに最初の動機付けは，宿題をやらしていい答えを出すのではないのです。習慣形成をつけるための宿題と考えればいいことです。だから必ずこのことをやっておいで，満点とらなくてもいいよ，ということでやらせる態勢をつくっていきます。それで私も２～３週間くらいやりました。学級や個人で違うと思いますから３時間でいいとは言えませんが，それぐらいやると子どもは家で勉強します。何時から何時までやるのだという態勢ができてきます。その次に，教師が与える宿題から子どもが選ぶ宿題に変えていきます。宿題を課題に変えていくわけです。どんなやり方をしたかというと「明日，国語があるね，国語をちょっと予習してこよう，算数もあるね，ちょっと予習，復習をしてこよう，問題は自分で見つけなさい，明日は理科ないんだから今晩は理科はやらなくてもいいよ。社会もないんだからやらなくていいよ。」すると，子どもが何か問題を自分で見つけてやってきます。やってきたことを先生が調べるかというと，調べるには一人一人大変です。グループで相互点検します。ただし，あっているかではなくやっているかどうかそれだけを点検します。たくさんやっているのは◎，ちょっとやっているのは○，なにもやらなかったら△。それだけの学習習慣がついてきたかどうかを調べます。やってきたことを，次に授業に生かしていくわけです。授業で持ち上げられたり，取り上げられたりすると子どもは非常に喜ぶわけです。そうすると，また明日のために予習をやってこようかな。今度は生徒の方が学習にどんどん入ってきます。基本は，学習習慣をどうやって続けさせるか，それからどうやったら自分からやるか，しかもやったことが授業の中に何だかの形で全員でなくてもいいわけですが生かしていくような場を作っていくか，それだけのことでものすごくやるようになってきます。親が，保護者会に来て「先生うちの子がずっと遅くまで起きて勉強しているんです，どうしたんですかね。」と話します。「子どもさんどんな感じでやっていますか。」と言うと，「目を輝かしてがんばっているんです。」と答

えていました。次の日に，「あんまり親に心配かけるなよ，そんなにがんばらなくてもいいよ。」と，生徒方に言いました。私たちは宿題や補習をこちらから与えるということを考えます。でも，自分から何かチャレンジしたいものがある，チャレンジしたものが授業に中に生かされる，そういうように考えて子どもが勉強し始める，子どももまた非常にそういうことでのおもしろさを感じています。最近，子どもたちは何のために勉強するんだろうか。先生方もなんて言ったらいいのか困っています。実は，勉強を何のためにするのかを疑問を持つ子どもは，本当の勉強のおもしろさをわかっていなかったのです。勉強をやってみて勉強は面白かったなあという思いが一つでも二つでもあれば，そういう疑問を持つことはないのです。やはり勉強はこういうことで大事なんだと思います，

総合的な学習はいってみれば基本的には，３つの流れがあります。課題発見，課題追究，そして成果，これは総合だけの学びの世界ではありませんが，子どもたちがどうやったら自分から勉強するのか。そういうことを考えていくことが大事です。総合は教師が子どもを抱え込まないことです，２つ目には，学ぶのは子どもであると考えて，どうすれば子どもが自分から勉強するのかということを一生懸命考えます。３つ目は，教師一人で何でも用意してやるのではなく，地域の人におじちゃん・おばちゃん達がいてこの人達なら勉強に協力してくれる人をたくさん活用します。４つ目は，教える立場の教師からプロデューサーになります。テレビ番組を作るときに，１番の力ある人がプロデューサーです。１番先にほめられるのが，プロデューサーです。腕が良かったからだとほめられます。自分が主役になるのではなく，いろんな人を動かして番組づくりをするのです。それと同じように総合的な学習も課題発見を子どもたちの課題をどうやって作り出すのか，お膳立てしてやって次にどうやって追究するのか，地域にどういうところに行くのか。またお膳立てします。全部教師がやるということではないのですが，そういうことをいろいろ考えてプロデュースするのが教師です。発表だって様々に違っていくから発表のことも生かしてやることも教師です。そいうことでは，子どもが自らの学びをどうすればいいかということでこういう流れを組んでいます。その時に子どもはどんなことを学びたいのか興味・関心を持ってください。子どもの興味・関心に教師が興味・関心を持つ。東京都の江戸川区の３年生，生活科の時にキャベツを作って食べています。３年生になってキャベツについて調べていましたが，総合になるのかなと思ったら「はてな」を作らしたらすごく面白い「はてな」を作ってきました。子どもたちは「キャベツってどうして丸くなるのか，雨の日と晴れた日ではキャベツの葉っぱの伸び方が違うのか。」教師だって答えようがないです。そしたら４枚の色紙をあげ，「１枚目の黄色い紙には，自分で調べたことを書きなさい。2枚目は，話を聞いたことを書きなさい。３枚目は，本で調べたり，インターネットで調べたことを書きなさい。４枚目は，キャベツを作っている専門家から聞いて書きなさい。」と，話しました。それで今までの総合というのは本やインターネットで調べたらそれで終わり，観察したり調べたり自分でやったらそれで終わりでした。これらを全部子どもがやります。これは，子どもたちに調べ方のスキルを身に付けさせることです。どのようにしたら具体的に子どもたちが自分で調べられるようになるか。これは典型的なやり方だと思います。先生方も是非まねするといいです。この基本は変わらないし，大人になっても変わりません。子どもたちがどうやったら学ぶようになるのか。そういう力を子どもたちに力をつけていくことがこれからの子どもたちを大きくしていくわけです。そういう点で，途中で言いましたがこれからの子どもは親の世代を乗り越えられるものが３つあります。「コンピュータ操作能力」，「英会話能力」，「問題解決能力」です。これでやっていくと子どもは自分から課題を身に付けていく，調べる手立てを身に付けていく，新しい世界を作っていく，知性や知力に生かす力を磨いていくことができます。

そこで，評価をどうするのか。実は評価というのは指導要録に載せる。あれは最後の最後でいいのです。これからは一つの題材，一つの単元、そういうことの中で子どもが評価規準のようなところまでいったかどうか見ておかなければなりません。そのために通知票も学期ごとで渡すのでいいのか，単元毎に渡すのがいいのか，変わるかもしれませんがそれも大事ですが，１番大事なことは，子どもたちに言葉かけをして子どもたちが自分から進んで勉強するようなアドバイスをしてあげることが大事です。アドバイスとは，ほめること，励ますこと，わからないことがあったら個別に教えてあげること，そしてアドバイスしてあ

げること。そういうことをその場その場の時間の中でつまりこういうプロセスの中でやっていきます。それを私は，その都度評価と言います。言ってみれば言葉かけのようなものです。それを是非やって欲しいものです。実はこのことに関しては日本の教師は，非常に下手だということがデータ的に分かっています。ベネッセで先程の国際比較をしたときに子どもたちに学校の先生方にやってもらっていることを聞きました（図５）。ひとつは休み時間，先生方は遊んでくれていますか。ほかのどこの国の先生方も忙しいと見えてほとんど遊んでいません。だいたいは７％以下でした。ほとんど遊んでいませんでした。先生からいつもほめられていますか。日本の子どもからの回答が最低でした。わずかに６％です。６％ということは，40人いればたったの２人ぐらいしかほめられていないということです。先生方はほめたつもりであっても，子どもはほめられたと思っていないのです。わからないことがあったら個別に教えてもらっていますか？それも６％でした。いつも励まされていますか，それも６％でした。悩みを聞いてもらっていますか？わずかに３％で，１人だったということです。ところがです，どの項目でも１番多かったのは，アメリカの子どもからの返答でした。例えば，いつも励まされたのは，日本は６％でしたが，ミルウォーキーの子どもたちの回答は，なんと75％です。４人に３人がいつも励まされています。励ましが大事，生徒の子どもの学習意欲をどんどん確かめてやります。先生方も是非言葉をかけてあげて下さい。声をかけてあげること，ほめること，その子どもの気持ちがホットになります。あー，先生からほめられた，認められた。テストは後で点数で返ってきますので，クールな評価です。しかし，その場で先生からほめられますので，先生と子どもの関係もホットになります。学級の関係もホットになります。そういう点では，日本の教師達はほめること，励ますこと，アドバイスすること，それの出し惜しみを今までやったきたのかもしれません。今までやってなかったのですからこれからやれば一層効果が上がります。先生方も明日からちょっと言葉かけをやりますと子どもは生き返ってきます。全くお金が無くてもできます。予算ゼロでも効果が上がります。子どもをホットな気持ちをつかって，力をつけて少しくらいの知識が足りなくても自分たちで課題解決をしていく子ども達がどんどん自分でやるような子どもたちが育っていきます。少ない時間をどう生かして将来につなげていくかが重要です。そのことが私たちに課せられた大きな課題だと考えます。そのために子どもたちにどんな手当てをするかということです。私たちの知恵や力で子どもたちが変わっていくということを考えて欲しいと思います。

(%)

	東　京	ソウル	北　京	ミルウォーキー	オークランド	サンパウロ
休み時間，遊んでくれた	7.9	⑥ 1.7	6.9	① 8.7	3.5	2.5
先生からほめられた	⑥ 6.3	12.3	24.3	①30.6	10.3	11.2
勉強のわからないところを個人的に教えてもらった	⑥ 6.2	28.3	40.0	①44.3	38.0	38.7
「がんばったね」と励まされた	⑥ 5.9	17.0	36.0	①75.2	52.0	9.3
悩みを聞いてもらった	⑥ 3.0	11.9	10.9	①43.3	27.3	18.6
休日，遊びに行った	⑥ 0.6	1.6	5.5	①13.8	1.8	2.0
平　　均	⑥ 5.0	⑤12.1	③20.6	①36.0	②22.2	④13.7

「しょっちゅうある」割合

図５　先生からしてもらったこと